

山口惠一郎編

日本地名辭典

市町村編

30773

山口恵一郎編

日本地名辞典

市町村編



石油大学 0175127

東京堂出版

編者略歴

山口恵一郎(やまぐちけいいちろう)
大正 10 年、愛知県豊橋市に生まれる。昭和 17 年、法政大学高等師範部歴史地理科卒。建設省国土地理院地図部研究員を経て、現在(財)日本地図センター地図相談室長・参事役。日本地理学会会報編集「地図」、歴史地理学会会報「歴史地理学紀要」の編集責任委員。南極地名委員会委員。編著書に「日本の土地利用」「日本地名大事典」「地図と地名」「コンサイス地名辞典(日本語)」「地名を歩く」「地名を考える」「日本図誌大系」「日本分県地図」「華族地名辞典」「地図の風景」など多数。

日本地名辞典(市町村編) 定価 4,200 円

昭和55年10月15日 初版印刷

昭和55年10月25日 初版発行

編 者 山 口 恵 一 郎

発 行 者 岩 出 貞 夫

印 刷 所 株式会社 三秀舎

製 本 所 協和製本株式会社

発 行 所 株式会社 東京堂出版

東京都千代田区神田 錦町 3-7 [〒101]

電話 東京 233-3741 郵便 東京 3-270

1525-155218-5164 ©1980 Keiichiro Yamaguchi

は し が き

正直いって、地名辞典をもう一度編集しようなどとは思いませんでした。それがヒョンなことでこうなってしまったのには、さほどわけがあったのではない。企画の当初、出版社の依頼に応じて、ひとつには自分の生涯における地名の仕事のなかで、「己れの可能性」を見出そうという気持だったように思う。その程度に漠然としていたものだったが、やってみればこれはたいへんな仕事だ。えらいことを引受けたと思った。そこで、過去の自分の経験にたらし、すこしマジメに考えざるをえなくなった。この『日本地名辞典』をどのように仕上げるかについて、である。

既存の多くの地名辞(事)典類をみると、それにはその形式・内容の上から個々の地名がもつ地理的な性格、つまり地域的性格を解説したものと、地名またはそれを構成する語の言語学的意味を説明したものとに大別される。前者はふつう地理的事典などと呼ばれ、「事」典と書かれるが、後者は語源辞典の仲間とみられ、「辞」典と書かれる。本書が「事典」の性格でありながら「辞典」と表記されているのは、概念上にこのような区別が生じる前から使用していた慣用をそのまま承けついただけではないかと思われる。しかし、そのことがいかようであれ、本書は地理的内容を説明する事典を目ざしていることにかわりはない。

この地理的内容には、歴史・観光等、その他もろもろの記事を含む、いうなれば地域を構成する要素や条件を示すことが目的であるが、も

とよりむずかしい専門的知識や成果を収録する「学術書」ではなく、「一般常識」としての地域情報書であることをねらいとしている。全国何十巻にもものぼる超大事典が、たしかに国民的規模において必要であると同時に、その逆の形でハンディな小型書も実用上の点から必要であることは論をまたない。さいわいにも、これら両タイプの地名事(辞)典類は、すでに数社の出版社から刊行または刊行中であるが、とくに小型実用書は常に時宜に即応したものがあっていいという考えで構想されたのが本書である。

しかしながら、小型には小型なりの制限があるので、もとよりあまり理想的なことはいえないが、その制限のなかで可能な限りの配慮をおこなった結果、小型の簡潔な内容とはいえ、日本の現状における地名に関して少くともそれなりに基本的な情報量を盛り、加えて地名の温存も図りたい、ということのためには、次のような構想が必要ではないかと考えた。すなわち本書は、まず、全国をカバーし生活の拠点わが郷土を説明する市町村とそれに類する行政上の広域地名だけを対象とした『市町村編』、次に、人間の生活舞台の環境の中心を形づくる自然への関心をひとまとめにした『自然地名編』、第三には、主要な生活の舞台でありながら歴史の進展にともなって消えていった旧地名、あるいは公けにはあまり表面に出なくなった「潜在」する地名などを収録する『集落編』、以上3部作の構成をもって完成させる。

今回刊行された『市町村編』は、そうした背景に立つものの初巻である。いままで多数の地名事(辞)典類編集の任に携ってきた編者が、ふたたび同様の仕事を手がけようとするとき、従来とは一味ちがうものになりたいと思うのは人情で、いや人情でなく、それが向上というもので、項目の構成・内容・配列ひいては辞典の型式にかかわる点に配

慮を加えたつもりではある。されど、この書が地名の本質的な機能である環境の説明、歴史の伝達、生活の表現などを記述しえたかどうかは、疑念であるところか、優秀な執筆者の方々のなみなみならぬ努力にもかかわらず、その最小限すらも盛りえなかったのではないかと思うのは、編者みずから痛感するところであるが、その實は一にかかって編者にある。

拙筆にあたり、執筆ならびに編集事務に携った各位、企画・編集・校正その他に多大な労を煩わした東京堂出版の松林孝至・池畑成功両氏に深甚の謝意を表したい。

昭和55年8月

編者 山口恵一郎

凡 例

1. 本辞典に収録した地名は、県・市・郡・町・村名、政令指定都市の区名（ただし編集途次において政令指定都市となった広島区は含まず）、及び旧国名を網羅した。
2. 配列は五十音順とし、清音、濁音、半濁音の順に並べた。
3. 同一表記で複数の地名がある場合は、北から順（慣用的な都道府県の編制順位）に記述した。
4. 同県内の同名の市・郡・町・村名、及び必要と思われる自然地名等があるものは、特にそれぞれの見出しを立てず、その項目内で改行して記述した。

例 鹿児島〔県・郡・市〕、岩手〔県・郡・町〕、利根〔郡・村・川〕

5. 1889年（明治22年）以降の市町村合併・編入・分離、市・町・村制等については、つとめてその年月日まで記述した。
6. 人口と面積については『全国市町村要覧53年版』（自治省行政局振興課編、第一法規出版）に拠った。
7. 人口数は精数を、面積は小数点以下第2位まで示した。
8. 年号はすべて西暦で記述した。和年号との対照は、見返しの年号対照表を参照されたい。
9. 巻末に、合併・編入等により消滅したおもな旧市町村名の索引を付した。

執筆者一覽 (五十音順)

朝倉隆太郎	国川三千代	沼田武
新井寿郎	桑厚公德	野崎清孝
五百沢智也	小林基夫	原田榮
池野茂	斎藤広志	東昭一
石井泰義	坂口良昭	福宿光夫
石原侑貞	重見之雄	降旗和夫
磯部利貞	篠原重則	細井淳志郎
伊藤等男	清水幸男	前田昇一
伊藤安男	須長博明	牧野洋久
井戸庄三	田沢彰	正木久仁
岩佐武彦	堂前亮平	矢ヶ崎孝雄
大脇保彦	島越義親	柳田長士
川崎茂忠	中川浩一	山口恵一郎
川村博忠	中村宗敏	吉川利明
岸本憲一	南雲榮治	米谷静二
喜多昭一	西川忠男	

日本地名辞典

市町村編

あ

あいお 秋穂 山口県吉敷郡。樺野川河口左岸、秋穂半島先端部を占め、周防灘に臨む町。面積 23.51 km²、人口 9391。1940年4月29日町制。元禄年間の黒瀬開作など近世干拓地が連続する。三田尻製塩地帯の西に隣接し、かつて製塩業が栄えたが、'60年塩田はすべて廃止された。大海湾ではノリ養殖が行なわれ、沖合の竹島は格好の釣場・キャンプ場をなす。

あいおい 相生 兵庫県西南部播磨灘に臨む相生湾の奥深くに市街地を形成する市。面積 90.51 km²、人口 42,282。1942年10月1日市制施行。県下9番目の市。'54年8月1日若狹野・矢野村編入。湾奥の近世山陽道の宿駅那波と、湾の東南部の漁村相生が主体となり、旧山陽線の駅名那波駅も'08年以降の造船業の発達にともなって相生と駅名をかえ、市名もそれに準じて「あいおい」となった。したがって、市の消長と造船業の関係は密接で、1事業所当りの製品出荷額において県下1位を占めているのは、播磨造船などの造船業によるものである（'76年）。相生湾は6m余の水深が湾奥に及ぶので、1万トン級の大船も内奥に入りえたが、現在では決して好条件とはいえなくなった。世界的な造船業の不振もあって、'70～'75年の人口増加率も3.3%となり、'40年代の市制を施行した当時の盛況はない。ただ、山陽新幹線相生駅の設定によって、山陽線・赤穂線の結びつきが市勢を支えるところとなっている。

あいおい 相生 徳島県那賀郡の町。面積 100.45 km²、人口 4,347。1956年9月30日、日野谷・延野・相生の3村が合併し町となる。赤松川が那賀川に合

流する所にあり、かつては赤松川を溯って海部郡日和田佐へ出る交通の要地であった。

あいかわ 合川 秋田県北秋田郡西部、大阿仁川と小阿仁川合流地帯の町。面積 112.52 km²、人口 9,783。1955年4月1日上大野・下大野・落合・小阿仁4村合併し町制。米作中心で、牧畜・林業も振興中で、秋田杉を産出する。

あいかわ 相川 新潟県佐渡郡西部の町。面積 192.55 km²、人口 13,571。1889年4月1日町制。1901年11月1日金泉村の一部、二見村の一部を、'54年3月31日金泉村と、'56年9月30日高千村・外海府村と合併。中心集落塩屋町。大佐渡山地北西の観光の町。1601年「道遊の割戸」発見以来徳川幕府の直轄下で金山の町として16世紀末より18世紀初頭にかけて最盛期。飯山道・外海府・尖閣湾・海中公園・民謡佐渡おけさは佐渡観光の中心。相川郷土博物館があり無名異焼を特産。佐渡・弥彦国定公園。

あいかわ 愛川 神奈川県北西部愛甲郡の町。面積 34.11 km²、人口 27,216。1940年4月1日町制施行。'55、'56年同郡高峰・中津2村を編入。中心集落は平原。丹次山地北東端にあたり、中央部を中津川が南東流。北西部清川村にかけ中津溪谷。古くより平原部として絹織物・絹織糸があり、現在ミシン糸・シツケ糸などは全国の70%を生産する糸糸工業の町。三増の古戦場、厚木市にかけ中津川内陸工業団地がある。

あいこう 愛甲 神奈川県北西部の郡。名の由来は、もとアユカワ（鮎河）と呼び相模川の古名から起因。愛川町と県下唯一の村である清川村を含む。面積 106.06 km²、人口 30,470。

あいずみ 藍住 徳島県板野郡の町。面積16.80km²、人口17,004。藍園郷・生吉の2村が1955年4月29日合併して町となる。町の東部の見性寺は、中世の勝瑞公の城跡である。藩政時代の藍作の中心地で、今も僅かに栽培されているが、現在は多く近郊野菜や花卉栽培に転換している。

あいだ 英田 岡山県東北端の郡名および同郡内の町名。

英田郡は英田・美作・作東・大町の4町と東栗倉郷・西栗倉の2村からなる。面積402.85km²、人口38,223。吉井川の支流古野川の流域にあって兵庫県・鳥取県に接する。もと美多とも書き、中世末に北の吉野、南の英田の2郡となり、1900年に再合併。郡の中心は美作町である。

英田町は英田郡の南端で、面積63.65km²、人口4,207。1955年2月1日福本河会郷の2村が合併。'56年2月1日勝田郡公文村の大部分を編入。町域の西半は吉野川の氾濫原。東半は備作国界に接する山地である。中心集落福本の北東真神には国指定重文の三重塔がある長福寺がある。

あいち 愛知 本州中南部太平洋岸の県および郡。県は面積5121.69km²、人口6,067,074。県庁は名古屋市。古くは三河の国と尾張の国にあたる。1872年名古屋県が愛知県となり、同年額田・豊田を合併。現在、名古屋(1956年政令指定都市、16区)・豊橋・岡崎・一宮・瀬戸・半田・春日井・豊川・津島・碧南・刈谷・豊田・安城・西尾・蒲郡・犬山・常滑・江南・尾西・小牧・稲沢・新城・東海・大府・知多・知立・尾張旭・高浜・岩倉・豊明の30市、15郡47町11村がある。

愛知郡は尾張に属し、面積74.40km²、人口67,234。延喜式では愛智。県名の愛知はこれによる。1961年通水した愛知用水は木曾川より取水し知多半島に至

る。名古屋・豊明が市制を施行したので、東郷・日進・長久手の3町。

あいづたかだ 会津高田 福島県会津盆地の南部に位置する大沼郡の町。面積194.64km²、人口16,997。1955年3月3日高田町と赤沢・永井野・尾岐・東尾岐・旭・藤川の6村が合併。中心高田は下野国に通ずる宿場町で六斎市もたつ市場町でもあった。伊佐須美神社のお田植祭は伝統ある祭事でしられる。法隆寺・法用寺には仏像の重文がある。龍興寺の一字蓮台法華経は国宝。

あいづばんげ 会津坂下 福島県会津盆地西部にある河沼郡の町。面積91.32km²、人口20,843。1955年4月1日同郡坂下・八幡・金上・若宮・広瀬・川西5村合併、会津坂下町となる。'60年8月1日耶麻郡高郷村の一部を編入。中心街坂下は谷口集落的存在で、幕末には六斎市が開かれていた。立木観音堂、塔寺八幡宮長鏡は国の重要文化財に指定、文化財も多い。

あいづわかまつ 会津若松 福島県会津地方の中心都市。松平氏23万石の城下町。面積286.26km²、人口110,804。1899年4月1日県内初の市制。1951年4月1日北会津郡町北村、'55年1月1日漢村・一笑村・高野村・神指村・門田村・大戸村・東山村を編入して会津若松市と改称し大沼郡本郷町の一部を編入。若松は、1384年芦名、1592年蒲生氏郷が鶴ヶ城と城下町を建設し、保科氏、松平氏に変わり、県下最大の藩となったが、1868～69年の戊辰戦役で焼失。白虎隊の墓の飯盛山・若松城跡や、御薬園(松平氏庭園)・山鹿素行生地など歴史的由緒の地が多い。また、清酒醸造・漆器・樹下駄などの伝統的産業も盛んで、市内に東山・芦ノ牧などの温泉もあり、磐梯山・猪苗代湖・磐梯高原にも近く観光都市の性格も強い。近年は工業の発展もあり、商業の近代化も進むなど新しい動きがみられる。県立会津短大・県行政連絡

室もある会津地方の中心地。

あいとう 愛東 滋賀県愛知郡東部の町。面積41.55km²、人口5,868。1955年2月11日角井^{みづ}・西小坂^{にしこさか}の2村が合併して愛東村成立。71年2月11日町制施行。愛知川北岸の水田農業の町で、茶^ち・スイカが特産。開発の歴史が古く、古代百済^{ひやくせい}からの渡来人が定住したといわれる。北部にある百済寺^{ひやくせいじ}は湖東三山の一つで、聖徳太子の創建と伝えられる。72年9月16日の山崩れで全滅した鈴鹿山中の大蔵^{だいざう}は、75年4月に麓の上岸本地^{じょうど}先へ集団移住して工場をもつ住宅団地をつくった。

あいの 愛野 長崎県東南端島原半島の北端にあり、諫早^{いさはさ}平野に接する南高来^{みなきた}郡の町。面積11.87km²、人口4,337。1949年町制。交通上の要地で、古くは、愛津が港町をなしたが、干拓の前進と島原鉄道の建設によって駅付近が中心地となり、ここで国道も分岐する。愛津には、島原の乱の首塚がある。町の大部分を占める扇状地は、ジャガイモの特産地で、扇頂部には無線電信送信所や愛野展望台がある。

あいべつ 愛別 北海道上川^{かみかわ}支庁上川盆地北東部に位置する町。面積247.19km²、人口6,354。1961年8月1日町制。地名は、アイヌ語のアイベツより転訛。アイは矢、ベツは川、矢のように早い川の意。1894年、殖民地区画設定、95年和歌山県などから300戸入植。石狩川の支流愛別川の合流点に中心集落がある。川に沿ってわずかの耕地が展開する。愛山^{あいさん}溪^きの温泉はここから上流36kmにある。

あいみ 会見 鳥取県西部、西伯^{せいへく}郡。米子市南部の町。面積31.04km²、人口3,966。1955年4月25日賀野村と平間村が合併して成立。法勝寺^{ほふしじ}・小松谷^{こまつや}川流域を占める。和名抄の会見郡天万^{てんま}郷、星川郷にあたる。周囲には多数の古墳群や、条里制の遺構がみられる。中世富田荘・星川荘・小松荘の荘園。中

心の天万は1861年より新上方往来の宿場となり繁栄。1924～64年まで法勝寺(西伯町)・米子間を法勝寺電鉄が結ぶ。

あいら 吾平 鹿児島県大隅半島中央部にある肝属^{かんしよ}郡の町。面積58.68km²、人口7,658。1889年4月1日始良^{しりょう}村として発足、1947年10月15日町制をしき吾平町と字を改めた。神代三山陵の一つ吾平山陵を中心として伝説ゆたかな町。柑橘類の生産と畜産に特色がある。

あいら 始良 鹿児島県中部にある郡および町。町は鹿児島市の北東に接する始良郡の町。面積102.92km²、人口29,056。1955年1月1日帖佐^{ていさ}町・重富^{しげとみ}村・山田村が合併して、郡名を冠して始良町となった。別府川・思川の沖積平野があり、海岸に重富・帖佐の2千拓新田がある。帖佐の千拓地はもと県下唯一の塩田であった。

始良郡は鹿児島湾北岸から霧島に至る地域。面積853.58km²、人口140,833。現在、加治木^{かぢぎ}・始良^{しりょう}・蒲生^{かみう}・溝辺^{みづべ}・横川^{よこがわ}・栗野^{くりの}・吉松^{よしかま}・牧園^{まきの}・霧島^{きりしま}の7市・1町を含む。温泉が多い。始良カルデラは鹿児島湾北半に相当し、桜島はその中央火口丘。

あおがき 青垣 兵庫県東部氷上^{ひなみ}郡の町。面積100.15km²、人口8,577。1955年4月11日佐治^{さじ}町・芦田^{あしだ}・神楽^{かみ}・遠阪^{とんぱ}村が合併、青垣町設置。佐治川(加古川)源流の小支谷が町域。佐治は『延喜式』山陰道佐治駅にもとづき、東南からの山陰道は西北の遠阪峠を経て但馬^{たんま}に抜けた。中世以降交通幹線から外れるが、山間支谷に豪族が根をはり佐路^{さろ}などの市場集落ができた。近世は遠阪峠經由で生野^{なまの}銅の輸送路となり宿駅機能も付加された。

あおがしま 青ヶ島 東京都八丈支庁の村。火山島の1島1村。面積5.23km²、人口185。1785年の大爆發で村落を失い、無人島になった歴史をもつ。定期船が接岸不能で、冬期には欠航も多い。木炭の

生産に頼っている。

あおき 青木 長野県東部、小県郡に属し上田盆地西端の村。面積57.14km²、人口5,340。1957年3月31日浦里村当郷・川西村浦野の一部を編入。国道143号線が上田から松本へ通じる。浦野川沿いの雑作と山麓部の果樹栽培と林業の村。観光・保養地として国民保養温泉の田沢・香掛の両温泉、古刹大法寺、石仏群のある修那羅峠がある。

あおもり 青森 本州最北端の県、およびその県庁所在地。面積9,000.35km²、人口1,532,915。古くは広大な陸奥国最奥部にあたり、明治になって陸前・陸中とならぶ陸奥となり、西を津軽、東を南部地方にわたる。1871年弘前県を経て同年青森県となる。現在、青森・弘前・八戸・黒石・五所川原・十和田・三沢・むつ8市、8郡33町26村がある。

県都青森市は面積693.48km²、人口277,303。1898年4月1日市制。1919年油川町、'51年4月1日滝内村、'54年5月3日大野村、'55年1月1日備井町・横内村・東岳村・高田村、同月15日浜館村・荒川村、3月1日新城村・奥内村・原別村、'56年9月1日後潟村、'62年10月1日野内村をそれぞれ編入。藩政時代初期までの青森は善知鳥村という漁村であり、現在の安方町二丁目にある善知鳥神社を中心に開けた。1624年津軽藩第2代藩主信牧はこの地に港を築き東廻り航路による米の江戸回送を開始してより発展。明治時代に入り1871年県中央部に位置する青森に県庁が弘前より移る。'73年北海道の函館との間に定期船の運行開始。'91年東北本線が青森まで開通。1905年奥羽本線が同じく開通。本州の北の玄関として名実ともに交通上の要地となる。明治前期までは当時の棧橋に近い浜町および本町が商業的中心をなしていたが、青森駅の開設と棧橋の駅付近への移転やさ

らに青森駅の南寄り移転などに伴って新町通りが繁華街となる。'10年の大火、'45年の戦災により市街の大半が消失したが、その復興とともに新たな市街地形成をはたす。近年、市西部にフェリー埠頭、木材工業団地が出現。市東部にある浅虫温泉は旅館40余をもつ東北地方有数の温泉で付近一帯は浅虫夏泊、半島県立自然公園に含まれる。浅虫南西の野内にはかつて津軽藩藩境の関所があった。市城の南部を占める八甲田山は十和田八幡平国立公園に属し、主峰大岳西麓にある酸ヶ湯温泉は'54年国民温泉に指定。八甲田山東北麓の田代平は'02年青森第5連隊兵士の雪中行軍遭難で知られ、放牧場や湿原植物群落がある。青森市街と八甲田山との中間の雲谷は展望の開けた高原で市営のスキー場がある。市城南西部の丘陵地にある青森空港は'65年開設。例年8月3〜7日のねぶた（仮武多）祭りは東北三大祭の一つで極彩色の組ねぶたが市内を一巡する。

あおや 青谷 鳥取県東部、気高郡の町。面積68.16km²、人口9,721。勝郷川、日置川の流域。1953年7月1日青谷町・日置谷町・中郷・勝郷村が合併。翌々年日置村を編入。中心の青谷は天正・慶長年間鹿野在、亀井藩の外港。朱印船貿易で海外まで進出。藩政期山陰道の宿場や、藩倉が置かれた。現在、小漁港。夏は海水浴客で賑わう。夏泊は海女の漁村で知られる。熔岩台地突端の長尾鼻には、展望のよい魚見台がある。日置川上流の山根、河原は寛永年間から因州和紙を生産。藩の御用紙供給地。

あおやま 青山 三重県名賀郡の町。1郡1町。面積108.68km²、人口7,747。1955年3月1日阿保町と上津・種生・矢持の3村が合併して成立。上野盆地南東部の農林業の町。中心集落の阿保は旧初瀬街道（現国道165号線）の要衝に位置し、杉・檜などの木材の集散地として発達した。町の東部にある青山

高原は室生^ニ赤目^ニ青山国定公園の一部に属し、伊勢湾の眺望がすばらしく、ツツジの咲く頃はハイキングに絶好で、最近では「関西の軽井沢」として別荘地の開発が活発である。

あかいがわ 赤井川 北海道後志^ニ支庁北部の村。1906年4月1日村制。面積280.59km²、人口1,670。村名は、盆地を流れる川の流域が湿地で川が汚染、赤色に見えたためといわれる。村の開基は1893年余市町の林長右衛門以下28名が組合をつくって開拓したことにはじまる。農牧業をとし、米・ジャガイモ・小豆・野菜を産し、メロンの名が出はじめた。中心集落赤井川は、一般にいわれる赤井川カルデラ底の中央にあるが、カルデラについては異説もある。

あかいけ 赤池 福岡県北部直方^ニ市に南接する田川郡の町。面積16.28km²、人口93,741。遠賀^ニ川と中元寺^ニ川の合流点で古第三紀丘陵が広く分布。採炭の歴史は古く、1837年に小倉藩の赤池会所^ニ設置。明治中期以降本格開発で明治赤池鉱^ニが生れ炭鉱町として繁栄した。1960年代の合理化以来町勢衰退。北部の福智^ニ山麓の上野^ニは小倉藩の御用窯の伝統をもつ上野焼で有名。陶土の夏吉^ニ土に恵まれ民芸ブームに乗っている。

あかいわ 赤磐 岡山県南部、ほぼ旭川と吉井^ニ川に囲まれた郡。面積252.47km²、人口48,868。吉井川寄りの磐梨^ニ郡とその西赤坂^ニ郡が1900年合併して赤磐郡と称し、物理^ニ村（のち瀬戸町）に郡役所をおく。現在、瀬戸^ニ・山陽^ニ・赤坂^ニ・熊山^ニ・吉井^ニの5町よりなる。

あかおか 赤岡 高知県香美^ニ郡、高知平野の東部、土佐湾岸の町。面積1.70km²、人口4,331。1899年2月15日町制。香宗^ニ川の河口部、砂堆上に立地した街区は、戦国期以来、在郷町として発達、旧郡役所など官公署が集まり、商業も、さかんで、香美郡の中心地であったが、近年は、南国市・野市町などへ機能

の移動がみられる。チリメンジャコなどの沿岸漁業地。県下最小の町村で、人口密度2,480人/km²は高知市をしのぐ。

あかぎ 赤来 島根県東南部、飯石^ニ郡にある町。面積119.05km²、人口4,521。1957年1月1日赤名^ニ町と来島^ニ村が合併して発足。出雲・石見・備後の三国境に接する。昔から広島県側との間に関係が深い。中世守護の赤穴^ニ氏が瀬戸山に築城以来、9代200年間支配。中心の赤名は牛馬市で栄えた。近世以降広瀬藩領。赤名峠は1964年、赤名トンネルが開通。松江・広島間に特急バスが運行。1956年来島貯水池ができ、この水を江^ニ川に落して発電（潮発電所3.6万kW）。近年過疎化が進む。

あかぎ 赤城 群馬県の山の名。同県勢多^ニ郡の村名。村は赤城山の西斜面に位置し利根川に接する。面積78.18km²、人口13,714。1956年9月1日横野村と敷島村が合併して赤城村となった。赤城山頂の大沼^ニから流出する沼尾川が村内を流れ、利根川に合している。主産業は農業で、上三原田歌舞台（県重要文化財及び国の重要民俗資料に指定）や敷島のキンメイチク（国指定）や溝呂木の大ケヤキ（県指定）・滝沢石器時代住居遺跡（国の史跡指定）がある。赤城山は榛名^ニ山・妙義山とともに上毛三山の一つ。標高1,928mで截頭円錐型の二重式火山。中央火口丘は地蔵岳で火口原湖の大沼^ニ、火口湖の小沼^ニがある。赤城山の山頂部一帯は赤城県立自然公園に指定され、その中心は大沼で四季を通じて観光客でにぎわう。

あかさか 赤坂 岡山県赤磐^ニ郡中部砂川^ニ上流域の町。面積42.78km²、人口5,792。1953年3月1日鳥取^ニ・軽部^ニ・佐岡^ニ3村合併、旧赤坂郡名をとって町制。のち布都美^ニ村瀬ヶ原^ニを編入。かつての鳥取庄・軽部庄の地で、南部には条里遺構もみられ、古くから開けた。中心集落は旧郡役所所在地で砂川

の谷口集落町刈田註。近世には赤坂白木綿を産したのが明治期に衰退、かわって桃・ブドウの産地となる。

あかき 赤碓 鳥取県西部、東伯耆郡。大山の北東麓を占め、矢筈ヶ山(1359m)から北流する勝田川の流域の町。面積57.27km²、人口9,748。1954年1月1日赤碓町・成美町・以西・安田村が合併。大山火山支脈の船上山(616m)は、1333年船上山合戦の古戦場。山頂に後醍醐天皇行在所跡がある。中心の赤碓は漁港。藩政期に海防の必要から赤碓台蔵倉場が作られ、旧八幡郡の貢米を納めるがあった。国や県の農林、畜産研究機関が多い。南部の山川木地などは木地屋集落が起源。

あかし 明石 明石海峡に臨む兵庫県の市。面積49.21km²、人口243,343。1916年11月1日県下で第4番目に市制施行。'42年林崎村、'51年1月10日大久保・二見町・魚住村を編入。旧城下町で、海抜20m前後の播磨層群崖端の明石城跡を中心に、東西に長い沖積低地の市街地形成と、丘陵部にひろがる市域とはかなりきわ立った対照性がある。播磨層群よりなる台地は播磨灘に10m余の崖を形成し、大久保町西八木の海岸から明石原人が発見されたのは、'31年のことであった。震災で消失した明石原人の腰骨は多くの論議をよんだが、日本の洪積世人類研究のいとぐちとなった。646年の詔に畿内の西端として「赤石瀬淵」が記され、『延喜式』の明石駅家は市街地東端の大蔵谷と推定される。魚住の江井ヶ島は播磨三泊の一つとされたが、海岸線の変化によって喪え、明石浦にその機能を奪われたようである。明石海峡は、淡路島との間約4km、潮流は最高5ノットに及ぶので、播磨灘と大阪湾との間の難所であった。淡路島岩屋と明石浦とはともに白砂青松の景勝地で、岩屋の松帆浦は東西方向と明石との南北航路の待帆(潮待ち)の意で、845年には

南北航路用の船と舟子を置いた記録がある。この海陸の要地は、近世当初に姫路池田氏領であったが、1617年本多氏の入部と築城で城下町が形成されることになった。その後城主は松平・大久保・松平・本多・松平氏とかわるが、明石港の繁栄は領主の財政窮乏にもかかわらず東播磨の中心となった。播磨灘・明石海峡の漁業もそれを支える有力な基盤であった。現在も、明石タイはへつたが、サワラ・ハマチ・タコなどの水揚げがあり、対岸の岩屋にわたる遊魚客も多い。明石・岩屋間のフェリーは四国への自動車交通で活気を呈するが、本四架橋によって港の変化は余儀ないであろう。西部の大久保地区は、工業地帯としての発展がめざましい。なお、旧城跡の明石公園には日本標準子午線通過標(東経135°)がある。

あかしな 明科 長野県中央部、東筑摩郡に属し、松本盆地に面した町。面積42.20km²、人口10,273。1955年4月1日、中川手村と東川手村が合併し成立。翌年9月30日北安曇郡七貴村、'57年3月31日に陸奥村の一部を編入した。中心集落の明科は犀川・高瀬川・穂高川の合流。湧水でニジマスの養殖が行われている。東川手地区は筑摩山地を占め畑作が多い。

あがつま 吾妻 吾妻郡・吾妻町・吾妻川など。郡は群馬県北西部に位置し、北に三国山脈、西に草津白根山・四阿山・浅間山があって長野県と境する。面積1,277.91km²、人口75,511。中之条町・東村・吾妻町・長野原町・嬬恋村・草津町・六合村・高山村の8町村。吾妻川水系の地域で農林業が主。コンニャク・キャベツ・ハクサイ・レタス・ジャガイモが特産。草津温泉をはじめと温泉も多い。吾妻川は上信国境鳥居峠に源を発してほぼ東流し、渋川市以東で利根川に合流する川。延長73.9km、流域面積1,357km²。

吾妻町は群馬県吾妻郡のほぼ中央に位

置し、吾妻川の兩岸に広がり、榛名山の西・北西・北斜面が広い面積を占める。面積222.00km²、人口17,569。1955年2月1日原町・太田・岩島・坂上4村が合併して原町となり、翌'56年2月1日改称。主産業は農業で、原町の市街地は商業も発達。町の北部には岩櫃が城址があり、原町の大ケヤキや薬師・温川・鳩ノ湯・松ノ湯・川中温泉があり、関東耶馬溪と称する吾妻峽がある。また、大戸の関所跡がある。

あかどまり 赤泊 新潟県佐渡郡南部の村。面積51.59km²、人口3,812。1889年4月1日村制。1901年11月1日真浦村・徳和村・三川村・川茂村の一部と合併。中心集落徳和。小佐渡山地の佐渡海峡に面する。温暖でビワ・シュロが自生し良質の竹ができる。米作とおけさ柿を産し、実用品・美術品の竹細工が盛ん。対岸寺泊港との間にカーフェリーの航路がある。

あかばね 赤羽根 愛知県渥美郡の町。面積23.73km²、人口6,522。1906年7月16日高松村・赤羽根村・若戸村が合併。'58年11月1日町制施行。太平洋に面する純農村で、表浜(太平洋岸)はかつては地引網漁が盛んであったが、沖合漁業の発達で衰退。伊良湖と舞阪の間の避難港を兼ねた赤羽根漁港が建設された。暖地性農業特に電照菊を中心にメロン・トマト・野菜のハウス栽培が盛ん。

あかびら 赤平 北海道。空知川に沿う炭鉱都市。面積132.58km²、人口27,677。1954年7月1日市制。最初の入植者は1891年熊本・岡山両県人34名と伝えられる。地名は、アイヌ語のフウレーピラの音と意を混じたもので、フウは赤い、ピラは崖をあらわす。1854年松浦武四郎は、空知川沿岸地帯に石炭があることを紹介し、1918年大倉鉱業(茂尻・砥)が開鉱、その後、住友赤平鉱・豊里鉱・赤間鉱の大手炭鉱が次々と開鉱し、'37年ごろには炭鉱都市として成長。'69年には

人口約38,000人を数えた。石炭産業の合理化により'67年に豊里鉱が閉山、'71年の歌志内鉱炭鉱の開山によって、住友石炭鉱業株式会社唯一の鉱山である赤平鉱がビルド鉱として稼働している。

あかぼり 赤堀 群馬県佐波郡。赤城山南麓で、渡良瀬川扇状地の西端部にあたる村。面積24.47km²、人口10,418。主産業は農業が中心で、特にスイカの生産は有名。養蚕も盛ん。村の東に早川、西に粕川が流れている。古墳が多く分布し、今井には赤堀城跡がある。国道50号線が東西に走っている。

あかむら 赤村 福岡県中部、田川郡東部の村。面積31.18km²、人口3,937。英彦山麓から広がる山地・丘陵が大部分を占め、中央を周防川に注ぐ今川が狭い谷底平野をつくる。北流する今川が流路を東に転ずる地点に中心集落の油須原があり、国鉄田川線の駅がある。旧中津街道の裏宿であった。炭鉱がなかった郡内唯一の村で、良質の米や栗の産出で知られる。田川市に近く炭鉱通勤者が多かったので閉山の影響は大きい。

あがわ 吾川 高知県仁淀川左岸にひろがる郡。吾川・吾北各村、伊野・池川・春野各町よりなり、高知県の紙業地で原料供給地でもある。面積533.4km²、人口50,869。

愛媛県境に位置する吾川村は面積83.52km²、人口4,838。仁淀川が形成する横谷部にあたり、水田は少なく林業のほかトウモロコシ・大小豆・ミツマタ・野菜の畑作農業が中心。村内を国道33号線が走り交通は便利。仁淀川本流大湊に大規模なダム建設がすすめられている。

あかん 阿寒 北海道釧路支庁北部に位置する町。面積737.62km²、人口7,996。もと吾幸村と称し、1937年鶴居村を分村、阿寒村とし、'57年1月1日町制。旧阿寒川が釧路川に合流する所を、ラカン・ブツとよび、うぐいの産卵場の川口の意。和人がラカン川と呼び、